

---

# CONNECT ~コネクト~

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CONNECT ～コネクト～

### 【Nコード】

N0723E

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

両目を開けると普通の人間だが、片方の眼ずつをあけると……とある少年の物語。

## プロローグ（前書き）

プロローグの作者より、この部分を読まなくても問題はありまん。ですが、彼の過去を知るにはいい話だと思えます。

## プロローグ

### プロローグ

一人の少年、名前を天道時時雨てんどうときぐれという。

彼はちよつと変わった……いや、結構変わった少年である。

彼が特別なのか、はたまた彼の目が特別なのか……どちらかはわからないが、とりあえず彼の見える世界は変わっていた。

とても視力が弱いとか、二キロ以上離れているものをしっかりと見ることができるといふ視力の持ち主ではない。

両方とも視力は一以上あるといったところだろうか？しかし、時雨の目は左目を瞑ると右目では相手の心を覗くことができたり、人間じゃないものが見えたりもする……簡単に言うなら精神世界を見ることができるといふことだろう。

そして、右目を瞑ると……すなわち、左目のほうは機械が人権のようなものを手に入れてまもないこの世界では重宝するアクセス機能を持っているのである。これもまたセキュリティを一発で解析するのである。右目だけで。

以上のような能力を駆使すれば、悪の帝王になるなんて非常に簡単だったのだが……温厚な性格が功を制したのか、世界がのつとられるようなことはないだろう。だろうというのはこれから先、そういうことがあるかもしれないということなのだが……

とりあえず、この天道時時雨という少年はごくごく普通に幼少期を過ごし、幼稚園にいた先生に甘え、小学生になったら上級生とかに甘えていたりもしたものである。砂場では山を作っては知り合いたちに崩され、かわらで石を積み上げていては色々と邪魔が入ったものである。

今回は中学生になったときの話をしたいと思う……それは、よく晴れていた秋の日である……

「あゝつかれたな」

部活にはいると面倒だなというだけの理由でどの部活にも所属していない（時雨の通っている中学では部活に入っていないものは強制的に生徒会の雑用となる）天道時時雨は雑用係として苦楽（苦しみ9、楽しみ1）の生活を過ごしていた。

上級生に逆らうことも出来るのだが、それをした次の日にはきつと下駄箱に黒いラブレターか何かが入っていることは間違いないだろう。時雨には男からそういう類のものをもらいたくないということなので素直に従っているのである。

これが苦しみの殆どを占めており、残りの一は……………

「…………… 今日も穴見センプイ、美しかったな」

そついつと彼のちよつと童顔の鼻の下が伸びる……………これが、残りの一といったところだろうか？彼が入学してきて五ヶ月近くのときがこの中学で流れたのだが、毎日放課後そのセンプイを見るだけが楽しみとなっていた。

きっかけがあつたのは新しく発足した生徒会の雑用をこなしていたときだろうか？彼女は前の生徒会のときも図書委員長をしており、今では生徒会長補佐である。そして、はつきり言つて今の生徒会長よりも有能に違いない。

あなみゆきん

穴見幸恵……………これが生徒会長補佐の名前であり、憧れの穴見センプイの名前である。

天道時時雨の調べによれば、中学校近くのマンションに住んでおり、父母共に健在で彼女を含めて三人の兄弟がいるらしい。彼女が一番上ではなく、既に他の二人は高校や就職をしているそうである。天道時時雨の調べというよりも、生徒会室を掃除していた時雨がたま彼女の近辺書類を見つけた……………といったほうがいいだろう。もつとも、この書類も今では厳重に保管されているので新しい情報とはいえないが。

「…………… 明日も、きつと美しいんだろうな……………」

時雨はそんなことを言いながら夕陽が沈む方向とは反対側の自宅

へとだらだらと歩いていった。結構な道のりなので自転車許可を取り付けようとしたのだが距離ぎりぎり申請が却下されてしまった。比較的仲良くなれた上級生の生徒会メンバーにそのことを言ったら来年から改正されるそうではっとしている。

「今日の晩御飯、何かな」

ボーっとしながら考えるのは穴見センパイのことか、晩御飯のことだった。

中学生だったらもうちょっと学業面のことを考えたほうがいいと思うのだが、時雨の考えでは大体取れて高校受かればいいなと思っ  
ている程度という彼の担任教師が聞いたら間違いなく激怒するであ  
ろうてきとうな考えだ。

家に帰ったらゲームでもしようかなと思っっている時雨の日々は  
これからもつづくのだろう、と、彼自身考えている。明日も高嶺の  
花が見るのは無料であるという穴見センパイのりりしい横顔を見  
ることが出来るだろうとも思っていた。

しかし、これからもつづくであろうこの怠惰な生活は十秒後、崩  
れ去ることとなった。

キキーンッ！！

「ん？」

横を向くと、黒塗りでスモークガラスがつけられている車が止ま  
る。

なんだろう？それが時雨の第一に思った考えで、見えそうで見え  
ない車の中身が気になったのだが、なんだか怪しい感じがした。

誘拐か？急いで離れようとした時雨の頭にそんなことが思い浮か  
ぶ……しかし、男を誘拐してどうするのだろうか？という考えが  
思い浮かんだ。

身代金狙いなのかもしれないなと思ったのだが、それなら夕飯の買  
い物をしているおばさんたちが町を歩いているこの時間帯に帰って

いる自分より、もっと早い時間帯に帰っている小学生をさらったほうが計画的ではないのか？と時雨は考える。まあ、時雨も見た目は小学生に見えないでもないのだが学ランを着ていることが唯一中学生といえることだろう。

それならば、あの車の扉が開いて露出度の高い服を着て手に鞭を持った大人のお姉さんが出てくるのではないか？そして、自分を鞭で叩いておーほっほっほ！とか叫ぶのかもしれない……………と考えて自分が馬鹿な考えをしていることに気がついて思考を止めた。

結論として単なる車であるというのが時雨の見解であった。

だが、彼が考えていた考えは外れていた……………いや、少し前に考えていたこととは関係していたのだが……………

ガチャリ……………

「ん？」

どうやらあの黒塗りの車から人が出てきたようだ。時雨は相手と目をあわさないようにちらりと相手を確認した。

「？」

相手は白衣を着ており、細身だった。どこかでみたような顔をしているのだが……………思い出せない。

その白衣の男性は時雨のほうに近づいており、薄ら笑いのような含んだ笑いをしている。

時雨は思った……………この人はあれだ、どこか危ないところの白い薬を吸って頭がぱっぱらぱらになってしまった人なのだと……………今に奇妙奇天烈摩訶不思議な行動をするに違いないとも思ったのだが、現実とは違った。

身構えていた時雨の目の前に彼は立つと、白衣から一枚の名刺を取り出した。

「はじめまして、天道時時雨君……………私はこちらのものだ」  
渡された名刺を手に取り、名前を確認する……………

「……………穴見……………陽？穴見？」

名前よりも苗字のほうに考えが回り、ああ、どこかで見た顔だと思った時雨は生徒会室で落ちていた書類でみたことを思い出したのである。

「君、生徒会のメンバーだね？」

知り合い（まあ、穴見センパイのほうは時雨のことを知り合いと認識しているかわからないという一方的な片道切符だが）の父なので時雨は警戒（奇妙奇天烈摩訶不思議な行動をしたときにどういった行動を自分がするべきか）をとくと頭を下げた。

「いつも、穴見センパイにはお世話になってます」

主に、心の安定剤として……………

「いやいや、君のような優れた部下がいると職務が進むと幸恵も言っていたからお礼を言うのは幸恵のほうだろう……………私が娘に代わって礼を述べたいと思う」

お互いに頭を下げている状態で、どちらからというわけでもなく顔を上げる。

「それで、僕に何か用でもあるんですか？」

穴見センパイに何かをしてもらったとか、ちょっかいを出したとかそういう記憶がないので首をかしげる時雨に穴見センパイの父であると名乗った男は告げる。

「単刀直入に言うと、君の目に付いて興味があるものなんだが……………」

……………  
「やっぱり、それが……………時雨は思った。」

彼の目に付いては結構情報が流れている。

これは小学校の頃の教頭先生がその情報を時雨を監禁してまで聞きたい、悪い組織とか研究施設とかに高値で売りさばいたのである。その後、教頭先生は逮捕されたのだが情報が流れるスピードを緩めることが出来ず、時雨のことについて知ろう思えば小学生の体重から身長、好きな女の子の好みに歩き出すときの左右の足というプライベートな情報を誰でもお茶の間から知ることが出来るまでになっ

たのである。

ろくでもない教頭のおかげで時雨はまれに危なそうな組織にお菓子で誘われたり、綺麗なお姉さんにさらわれそうにもなった。まあ、そのつど警察が押さえてくれてはいたのだが………そういうわけで、時雨は目に付いてどうするべきかわかっていた。時雨を狙っていた施設や団体、おまけに組織なんかは重要なセキュリティをかくるためにはつきり言うとき時雨の左目を欲していたのである。だから、今回も時雨は言った。

「………残念ながら、僕の左目はもう使えませんよ？右目ならお化けを見ることがぐらいはできそうですけどね………」

右目は精神面………まあ、こちらについては知らないところのほうが多く、お化けとかそういう未だに存在があやふやな存在などを求めているのは宗教団体ぐらいだろうと時雨は思っていたのだ。見た目がどうみても研究員である穴見センパイの父には無用の長物だと判断したのである。

人を見た目で判断してはいけない………それを知ったのは五秒後だったのだ。

「おお！やっぱりそうか！」

「え？」

時雨はこのとき、自分が何か大きな渦に巻き込まれていつている途中だと気がついていなかった。

肩をつかまれ、その手には痛いぐらいの力がこもっている………

「その右目！相手の心を見ることができるんだろう？なあ、そうなんだろう？」

「………い、痛い」

言われて、正解だと思ってこの人は危ないとも同時に感じた。逃げようにも相手の力が強すぎてはなれることも出来ない。

「どうなんだ？はつきり言ってくれ！」

きつとこの人は嘘について自分を騙しているのだろうと時雨は思った………このままではやられると実感していた彼の耳に、相手の要

求が聞こえてくる。

「頼む！娘が……………幸恵が私のことをどう思っているか覗いてきてくれないか？」

「……………は？」

痛みも忘れて相手の顔をまじまじと見る時雨。この親父は今、なんと云っただろうか？

「あの、今なんていいました？」

「娘が私のことをどう思っているか覗いてきてほしいといったんだ！」

時雨は年頃の娘を持つ中年男性が大体抱くであろうそういう気持ちをまだ知らなかった。

「何故？」

「知りたいからだよ」

中年男性に対して汚いとか、不潔だとかそういう気持ちを娘が抱いていないか……………いや、別に思っていないても構わないのだが、とりあえず自分のことを粗大ごみか何かと娘が勘違いしていないかどうかと父……………穴見陽は時雨に説明したのだった。わざわざ近くのファミレスまで行って時雨の前にはオレンジジュースが置かれている。その説明に対して学校での彼女の行動を思い返して時雨は告げる。「いや、大丈夫でしょう。穴見センパイはそんな人じゃないと思いますけど？」

「それは君が家での娘を知らないから言えるのだよ……………私は恥ずかしながら妻に尻に敷かれていてね……………そんな私を娘がどう思っているのか、それを知りたいのだ」

右腕に傷があるのを時雨に見せる。

「これ、どうしたと思う？」

「えーと、研究が何かで事故を起こしたとかそういうのですか？痛々しいですね」

ガラス管が砕けてこの人に当たっているのを想像して青くなる時雨……………だが、現実はいちど厳しかった。

「……………浮気がばれて危うく妻にやられるところだった」

「……………」

時雨はそれを聞いてどう答えたらいいかわからなかった。

「これでわかっただろう？男女平等の世界は素晴らしいと思うが、女尊男卑はいけないと思うのだ」

わかってくれるだろうか？という視線を送られてくるのだが、別に彼女とかそういうのがない時雨にはさっぱりわからない。それならばと思つて自分の父を想像するのだが、母親とラブラブで今日も何回目かわからない新婚旅行に旅立っている。今度帰ってくるのはいつだっただろうか？と考えたところで現実へと戻された。

「浮気……………男だったらすると思わないかね？」

「……………いや、よくわからないんですけど……………話が逸れている気がするんですけど？」

「おっと、悪かったね……………」

すまないといって話は元に戻る。

「……………母親にしかれている私を娘がどう感じるか……………勿論、私も娘に粗大ごみだとかそういう目で見られないように整理整頓には気をつけているのだ。お風呂から上がったらパンツ一つで動き回るとか、休日は寝転がって新聞を見るといことは断じてしていない！」

どん！とテーブルを叩き……………客がいつせいに時雨たちに視線を向ける。幸い、客が少なかったので時雨はそこまで恥ずかしくはなかった。

「わ、わかりました……………穴見センパイの心を覗いてくればいいんですね？」

「そうだ！わかってくれたのか……………よかったよかった」

ありがとうと中年の男性が心から涙を流している。その光景を見るに耐えなくなった時雨は厄介なことを引き受けてしまったと感じ

たのだった。

「……………どうしたものだろうか？」

穴見陽からの依頼を受けたのは昨日……………そして、その悩みを実践するために生徒会室へと早めにやってきた。既に穴見センパイは生徒会室におり、まだ他の会員たちは来る気配がなかった。

扉の外から麗しい穴見センパイを眺めるのはいいのだが……………いかんせん、今から心を覗くには罪悪感が感じる。それに、心を覗いている状態で誰かに話しかけられたりしてしまったら厄介である。なぜなら、時雨の力を知らないものは殆どいないのでとりあえず何かをしているのがばれてしまい詰問されるだろう……………そろそろ会員たちが全員きそうなのである。

もつとも、この考えは時雨だけのものであつて実態としては会員たちは一時間後にようやく全員が揃うという遅刻振りであつた。

扉の窓から穴見センパイがこちらを見つけたようだ。手招きをしてくる。

「……………し、失礼しまーす」

そして時雨は思った……………今思えば、自分と穴見センパイが話すのはこれがはじめてではないかと。

「天道時君、ちょっと話があるんだけど……………」

「は、はい!？」

憧れのセンパイからそういわれて一気に有頂天になってしまった時雨。彼の頭の中には勝手に幸せそうなストーリーが展開され、穴見陽との約束はどこかに行ってしまった。

「昨日、父から何を言われたの？」

「……………」

しかし、穴見陽はすぐさま時雨の頭の中にリターンしてきた。どうやら、吹き飛ばされる前に命綱をしていたようだ。

昨日、一緒にいたところを見られたようだと時雨は思っただけを思いついた。

「え、えーと、た、たまたま会いまして……………」

「ふうん、たまたまね……………私さ、嘘つく人、大嫌いな」

大嫌い、大嫌い、大嫌い……………このとき、時雨はじめてあの穴見陽の気持ちがあった気がしたのだった。ああ、自分は嫌われてしまった、名実共に……………と時雨は一撃必殺を食らった者のように感じたのだった。

「……………」

無言の時雨に穴見センパイはにこりとして答える。

「……………でも、素直に答えてくれる人は大好きなんだけど……………」  
「実はですね……………」

命綱で助かっていた穴見陽だったが、大好きという言葉にはさみで綱を切られて時雨に裏切られたのだった……………天道時雨、彼はスパイとかそういう隠密行動に長けてはいないのかもしれない。

「はあ……………」

すっかりしゃべってしまった時雨（このことは幸恵には内緒であるということまで）に対して穴見センパイはこういった。

「……………私、約束を破っちゃう人も大嫌いなよ……………天道時君、今日はもう帰っていいわ。私、大嫌いな人と一緒にいたくないから冷たい、冷たすぎる……………とは時雨は思っていなかった。それよりもうっかり口を滑ってしまった自分に対して情けないとおもう気持ちのほうが大きかったからである。

「……………まあ、心を覗けただけでよかったか」

心を覗いた結果、わかったことがあった。時雨は近くの公衆電話に入って穴見陽の携帯電話の番号をプッシュする。

「……………あ、もしもし？陽さんですか？」

『ああ、私だ……………で、どうだった？』

「どうもこうも……………全部、話してしまいました……………すみません……………ですが、どうやら陽さんのことを嫌っているというより……………尊敬しているようです。穴見センパイの心はそう言っていまし

た」

それを告げるとたいそう嬉しそうであった。

『そうかそうか！実にいい結果だった……………ああ、そういえば昨日君とあったときから既に私たちは相手の罠にかかっていたようだ』

「罠？」

何か罠を仕掛けられていたのだろうかと思ふが、何も思いつかない。

『どうやら私の白衣に盗聴器が仕込まれていたようだったのだ』

「！？」

『もう一つわかったことがあるが、娘は完全に妻の手先だ……………この盗聴器は幸恵のものだったからね』

盗聴器を持つている中学生って何者だよ……………と、時雨は思いながら話を聞き続ける。

『まあ、今のところは幸恵に嫌われていなかったことを喜ぶことにしよう。何かお礼は必要かね？』

「いえ、いりません……………しいて言うならもうこういうことを頼むのはやめて欲しいと……………」

『わかった、これから先、私たちは無関係だ』

最後に心からのありがとうをもらった時雨は公衆電話の受話器を元に戻したのだった。

「……………」

無関係になったとはいえ、あの憧れであった穴見センパイからは嫌われてしまった事実はまだ変わらない。

「……………」

ほろ苦い一方的な恋心が見事に（主に父親の所為で）崩れ去ったことを時雨は感じると昨日よりも高いところに位置している太陽を眺めることなく、下を向いて彼は家へと向かって歩き出した。

「……………まあ、こんなものかもしれないな」

穴見センパイには彼氏がいるって噂だからなと最後に呟いて走り出したのだった。

次の日、時雨が大食い部なるただ食べるだけの部活にはいったのはやけ食いのためか、穴見センパイがいる生徒会にいたくなくなつたのかの両方であろう……………

## プロローグ：とある屋敷にて

プロローグ：とある屋敷にて

古ぼけた洋風の屋敷のある部屋に一人の老人が座っている。いや、老人というより初老の男性と行ったほうが適格だろう。彼は何もない空間へと視線を向けると驚いたような仕草を見せる。

「おや、これはこれは……………ここに人が来るのは久しぶりですね。さて、先ほどの少年が歩むべき未来を間違えてしまった……………という事などありません。ですが、あの子の彼の行動によって道はいつてしまうのなら掃いて捨てるほどあるほどの事です。ああ、あの時こうしていればよかった……………そうだったことが人生という道の中ではなくさんあります。ですから、間違いなんてないのです。勝手に間違いを自分、あるいは周りの人間が定義しているだけなのですから……………単純に言うならあの少年が今後どういった人生を歩もうともそれは間違いではなく、一つの結果です。例えばそれが少年にとつていいことでなくても……………話が逸れましたね。あの子の少年の行動、心象、周りの状況といったそれぞれの条件が組み合わさって人生は築かれていくことでしょう。目をそむけず、彼が行き着く先……………どういったものになるのでしょうか？残念ながら私が知る由などありませんね……………おっと、もうお帰りですか？またいずれ、あなたと合間見ることができると私は信じておきましょう。会おうと思えば会える……………いい言葉です、誰が言ったかは知りませんがね」

初老の男性はもう用は終わったとばかりに近くにある椅子に腰掛けて足を組む。

「では、ごきげんよう」

古ぼけた洋風の屋敷のある部屋に一人の男性が座っている。部屋

の中に霧が現れ、彼は軽く微笑むと目を閉じた。

## 四月二十二日 ナイトメア・スタート

小説部部长、天道時時雨は渡された小説を見て頭痛を抑えていた。

「……………いいかい、僕は出来れば面白おかしい小説を書いてきてくれって言わなかったかな？」

悩みの種となっている目の前の小説部員に目を向ける。

「……………え？これでいいんじゃないんですか？先輩の言ったおりに書いたつもりなんですけど……………」

首をかわいらしくかしげているのだが、時雨にとってはとぼけているとしか見えていなかった。

「君、どういった小説を書きたいって言ってたっけ？」

机から文化祭への小説分担表を取り出して確認する。

「えと、確か面白い小説を書いてくるでしたっけ？」

「そうそう、それであってるよ……………けど、これはどうみても僕の過去だよね？」

恨めしそうに目の前の女子部員を見てそんなことを言う。

「ええ、まあ……………でも、面白かったと思いますよ？」

「僕は面白くない」

「でも、ノンフィクション作家になるのが夢ですから……………」

「そんなことを言ってもなあ……………」

再び文句を言おうとした時雨たちの元に頃合を見計らったかのように訪問者が訪れる。ぼろぼろの扉がぎぎぎ……………といやな音を立てて開いた。

「……………時雨君、まだ帰らないの？」

そこに現れたのは幼馴染の霜崎亜美だった。

「え、ああ……………霜崎さんか」

意外そうな顔をしながらも時雨は立ち上がる。立ち上がったのだが、まだ未練があるのかあの小説を手放してはいなかった。

「あのさ、今日何か用事があるって言ってなかったけ？」

「え、ま、まあ……………そうなんだけど……………どうして霜崎さんが知ってるの？」

クラスでしゃべったのだが、彼女にしゃべっていたわけではない。時雨は首を傾げるも彼女は当然だとばかりに言っただけだ。

「それはまあ、同じクラスにいれば聞こえてくるときはあると思うけど？」

ちなみに、霜崎亜美は隣のクラスである。

「ん……………そうなのかな？とりあえず僕は帰るよ。他のところに行っている部員たちには今日は自由解散だって言っておいて？」

「わかりました」

「うん、ありがとうね」

「いえいえ」

そんなやり取りをしている時雨たちにじっとした目線を向ける霜崎亜美。だが、時雨は気づかずに鞆を持って部室を出たのだった。

時雨と霜崎亜美がであったのは五歳ぐらいだったのだろう。

毎朝、共に幼稚園へと向かい、隣の席でいつも一緒にいた。

しかし、世界がいつも同じ風景を見せることはないように彼らの関係も離れていくこととなった。

小学校に入ると時雨は主に男子たちと遊ぶようになり、そんな時雨を霜崎亜美は影から見ていたりもしたのだが、別に彼女が暗い性格というわけではない。どちらかというと時雨のほうが陰のあるところがあった。まあ、一般的な生徒だといっていいだろう。それに比べて霜崎亜美は明るく笑ってクラスの先頭に立っていた。高校二年になって生徒会長に立候補するも負けてしまったので今では副生徒会長となっている。

夕焼けが沈みそうで沈まないといった中途半端な状態を珍しく二人して帰路へとついていた。

「ねえ、時雨君ってあの子と彼氏彼女の関係？」

「あの子？あの子ってどこの子？」

少し調子外れたような返答をした時雨にむつとしながらも彼女は笑みを絶やさずわかりやすいように説明した。

「あの小説を持ってきた子」

「ああ……………なるほど。いや、彼女じゃないよ？それがどうかしたの？」

「……………いや、なんでもない」

言葉が続かず、二人して奇妙な空気のまま歩いていく……………もつとも、時雨のほうはそうは思っていないのだが。

「あ、あのさあ……………こうやって二人で帰るのって久しぶりだよね？」

したから覗き込むように時雨の答えを待つ彼女は時雨の目には新鮮に映っていた。

「んゝ確かにそうかもしれないね。最後に帰ったのは小学生最後の日だったかな？その後は自転車通学になったからね」

記憶を思い返すように時雨は頭を振る。

「うん、やっぱり小学校通ってたときが最後だね。あとは霜崎さんとは一緒に帰ってない」

「それなら、こ、これからは一緒にか、」

帰ろうよ……………霜崎亜美がそう言おうとしたときに時雨の携帯電話が鳴り出した。

「あ、ちよつとごめん……………」

携帯を取り出して耳にあて、時雨は相手と話をする。その表情を見た亜美は相手が時雨にとってとても親しい相手だと一発でわかった。相手のことをちゃん付けで読んでいるし、なんだか嬉しそうだ。時雨がしゃべっている言葉だけを聞くと先ほどの女の子のようだ……………時雨はどうかはわからないが、あの子はもしかしたら……………

霜崎亜美はそんなことを思い、自分の心にいつものような暗い影が出来たような気がした。

時雨は電話を切って霜崎亜美のほうへと頭を下げる。

「……………ごめん、僕忘れ物をしてきたようなんだ」

「忘れ物？」

「そう、ちよつとしたものなんだけど……………」

もう半分以上歩いてきており、ここから戻れば暗くなって学校を出ることになるだろう。

「じゃ、私もついてく」

「え？別にいいよ。そこまでしてもらわなくても。霜崎さんの手を煩わせるまでもないよ」

「いい、ついてく」

時雨もそれなら別に構わないけど？と言って亜美と一緒に学校へと戻ることにした。亜美は時雨の手を掴んだ。時雨はそれをぎよつとしてみる。

「……………あ、あのさ……………手、握ってもいい？」

「え？」

「その、思い出に浸りたいって言うか……………」

「ああ、成る程……………」

女の子って思い出に浸りたいときがあるって誰かから聞いたことがあったなと時雨は楽観的な考えをしてそうまとめた。ちなみに、彼と霜崎亜美が手を繋いだことはこれまで一度もない。

霜崎亜美は心が満たされた状態だった。とりあえず、時雨が誰かと付き合っていたとしても今、彼の隣にいるのは自分であるとはつきりと意識していた。

「……………時雨君の手って暖かいね」

「そうかな？僕、冷え性なんだけどね」

まったくムードのない時雨に文句も言わずに霜崎亜美はその手を愛おしそうにそつと握る。

誰もいない路地に二人きり……………しかも、もう夕焼けは沈んでいて暗い……………何度夢見たことだろうか？霜崎亜美はそう思いながらこの時間がずっと続いて欲しいと思っていた。小説部の女子部員が時雨と仲良くしていたときは心にどろりとした感情が芽生えたが、今はなりを潜めている……………時雨の隣にいるのは自分であって彼女

ではない……………自分だ。

「あ、あの……………霜崎さん？」

「え？あ……………」

気がつけば霜崎亜美は時雨を横から抱きしめる形となっていた。どうやらボーっとしている間にこうなってしまったようだ。

時雨のほうとしてはいきなり霜崎亜美が抱きついてきたので驚いていた。そう、驚く以外の感情はすべてどこかに吹き飛ばされていたのである。

「え、えつと、ど、どうしたの？」

二の腕辺りに当たる柔らかな感触にときどきしながら時雨は霜崎亜美へとたずねる。頬は硬直していてうまく言葉がつむげない。あのまじめな霜崎亜美がこんなことをしてくるとはぜんぜん想像していなかった。いや、彼女が自分と同じ道を通っていること自体不思議な出来事だったといっただろう。

「あ、ちょ、ちよつと寒いから時雨君をだ、抱きしめたら暖かくなるかもって……………」

「で、でも僕、冷え性だから……………」

「あ、そ、そうだったよね……………」

霜崎亜美は確かにそうだったのだが一向に離れる気配はなかった。それどころか、体を時雨に引っ付けてくる。完璧に二の腕には霜崎亜美の胸が押し付けられている。

はじめてのことで驚愕していた時雨の頭にだんだんと冷静さが戻ってきていた。しかし、腕に押し付けられている平均より大きい霜崎亜美の胸は彼の思考を半分以上ひきつけている。

よって、時雨の否定的言葉ははつきりすることなく口から出された。

「ぼ、僕、冷え性だから……………」

「それなら私が暖めてあげる」

彼女にも冷静さが戻ってきたのか、言葉がはつきりしていた。しかし、時雨とは対照的に彼女には離れたいという意味が伝わってこ

なかった。これでもかというほど時雨に引っ付き始める。

両足に霜崎亜美は自分の足を絡め、路地に時雨と一緒にそのまま倒れる。スカートから伸びている長い足はちよつとだけ血が出ていた。

「ちよ、ちよつと……………怪我してる」

「構わない……………から、その…」

徐々に時雨の体の上に乗し、時雨の胸の上に綺麗な手をのせる。上気している顔を近づけ、霜崎亜美は目をつぶった。

「……………」

時雨は完璧に彼女がこれから何をしようとしているのか悟った。いや、既に妄想でまさかなと軽く考えていたことだったのだがどうやら本当だったようだ。

もう目の前まで迫っていた霜崎亜美の顔を凝視していた時雨だったが、彼の顔が一気に緊張した顔へと変わる。

「きゃっ!!」

時雨は亜美を突き飛ばし、彼女の上に乗った。そして、急いで立ち上がった彼女の手を掴むといきなり走り出す。

「ちよ、ちよつとどうしたの、時雨君！」

「……………はなれないで！僕の隣にきちんといて！いや、隣にいてくれなくていいからこの手を絶対に離さないでね！」

それだけ言うと時雨は黙って走り出した。後方から物凄い音が聞こえ、それを聞くと時雨は住宅街の影に亜美を連れ込み押し倒して覆いかぶさった。

どん！つと鈍い音が聞こえてきて地面が揺れる。時雨と亜美の目には自転車が転がっていくのが見えた。

「……………まさか、こうなるとはね……………」

「え？」

押し倒した亜美を立たせ、時雨は手を引いて路地のほうへと歩き出した。

先ほどまで二人がいた場所はクレーターを形成していた。時雨が

元いた場所には棒のようなものが突き刺さっている。

「あれは？」

「逃げよう、ここにいちや、危ない」

冷たい、事実だけを告げる言葉。霜崎亜美は黙って頷いて不安から時雨に体を預ける。しかし、時雨は亜美を押しやった。

「……………霜崎さん、ここからまっすぐ走れるよね？」

「う、うん」

「じゃ、行つて」

時雨に背中を押されると、霜崎亜美は否定も出来ずに走り出した。ふと、空が視界に入る。霜崎亜美には空が歪んでいるように見えた。いや、見た目はまったく変わらない。直感的にそう思っただけなのかもしれない。だが、それは確実に歪んでいる。

五十メートルぐらい、走っただろうか？気がつけば霜崎亜美は住宅街にいた。いや、夕焼けはまだ沈んではいなかった。

「時雨君？」

後ろを振り返ってみるが、そこには誰もいない路地がただ、続いているだけだった。

霜崎亜美を送り出した時雨はクレーターのほうを見ていた。

「……………まさか、こんなところで来るなんてね」

まったく予期していなかったことを示すことに今の時雨が身を守るために使う武器は右手、左手だけだということだ。もつとも、これ以上に予期していなかったことは霜崎亜美のあの行動なのだが……

携帯がなり、時雨はそれに出る。相手はもう確認している。

「……………うん、うん……………なるほど」

一方的に言われる情報だけを聞き取り、電話を切る。自分がすべき行動はもう決まった。

まだ夕日が沈むのには早い時間帯だところではまったく役に立たない時計を見ながら呟く。時計は午前七時を指している。

走り出し、目標へと向かう。まだ姿を現していないが、襲撃者は確実に自分を狙っているようだ。

「ちっ！！」

右手で爆発、制服が少々破れるが関係なく走ることが出来る。問題は無い。もう襲撃者を攻撃しても遅い。

「……………あれか」

左目を金色に光らせ、時雨は空き地に不自然に置かれているオルゴールを見つめる。それに向かって思い切り拳を叩きつける。

「終わったかな」

時雨は屋上に自分がいることに気がつき、そう呟く。夕日はやはりまだ沈んでおらず、電波時計は午後五時三十二分を指していた。一陣の風が吹き、校庭の隅っこに植えられている桜の緑の葉っぱが静かに揺れる。

霜崎亜美のことが思い出され、彼女のほうに被害がなかったかどうかたずねる必要があるだろう。

時雨は屋上から急いで出ると、霜崎亜美と鉢合わせした。彼女はどうか走ってきたようで今にも死にそうな顔をしていた。

「……………はあ……………はあ……………だ、大丈夫だったの？」

「え、ま、まあ……………それより、霜崎さんも大丈夫だった？」

「……………うん」

時雨は少し困った顔をした。目の前の少女の顔を見ることでさっきまでのことを思い出す。柔らかい体を思い出し、押し当てられた胸のことで頭がいっぱいになりそうになって……………やるべきことを思い出した。

「霜崎さん、悪いけど携帯電話の番号、教えてくれないかな？」

「え？」

「駄目ならいいんだけど、連絡を取りたいときに取れないと困るから」

「も、勿論いいよ！」

携帯を取り出すと手際よく時雨にデータを送信する。まるで練習でもしたかのように……

「ん、ありがと……僕のも一応教えておくから何かあったら電話して」

「う、うん」

携帯電話の番号を交換すると、霜崎亜美はそのまま走り去ってしまった。

「まあ、あんなことがあった後だからな」  
勝手に解釈し、頷く時雨だった。

五月二日 霜崎亜美END

二、

笑って過ごせる日々を時雨はまだ過ごしていた。あれから少しの月日がたち………といっても、十日ほどが過ぎたぐらいなのだが。

あれから変わったことといえば、毎晩のように霜崎亜美から携帯へと電話がかかってきている。話している時間は一時間近くだ。隣の家に住んでいるのだし、窓を開けて放そうと思えば話すことはできるのだが、彼女は気がつかないのかずっと時雨に携帯電話を使用しての会話を求めているようだった。既に時雨の携帯の電池は換えなくては使い物にならないだろう。

電話について時雨はちよつと悩んでいた。いや、霜崎亜美のことではない。最近、ノイズが入ってきているのだ。そのたびに霜崎亜美の身に何かあったのだろうかと考えなくてはいけなくて、あわてて隣の家まで走ってくると安否を確認する毎日だった。

「……………あの空間に入っちゃったからなあ」

一昔前のことを思い出してそんなことをぼそりと呟く。

あの空間について知っている知り合いの話によれば一ヶ月ほど待っても何もなければその人物はあの空間にはもう入れないとのことだったが、まだ十日ほどしかたっていない。注意をしておくことに異議はないとのことだった。まあ、霜崎亜美の身辺警護をしておくのは時雨の仕事となるので時雨の気苦労が増えるだけだったのだが。

もっとも早い話が時雨と同じ場所、時間を霜崎亜美が共有してなければいいのだ。しかし、あの日を境に時雨の視界の端には絶対に霜崎亜美の姿があった。これまでもそうだったのかもしれないが、彼女のことが気になってしょうがない。

ふとした拍子に見ているのだ、ずっと。

別に時雨は霜崎亜美のことをどうとは思っていない。

問題は彼女の影にいる何かだ。

あそこから帰ってきて確実に彼女の影には何かが棲んでいる……

……いや、潜んでいるといっているだろうか。

これが何なのかは大体見当がつくが、見当がつくからと言って相手に背中を見せるのはまずい。襲われる可能性があるからだ。もしも襲われてしまったら霜崎亜美には二回目に襲われたということになる。いや、あのときの住宅街のことはカウントには入れていない。あれも一種の襲われ方だがどうこうなったわけではない。もっと小さい頃だ。そう、二人がであって間もないころに……

「……………寝るかな」

時計はいつも自分が寝ている時間帯を指している。今日はもう疲れた。英語の斉藤先生が執拗に当ててきたのが一番つらかった。英語は理解できないし、あの先生の言動も理解することは出来ないだろう。

明日は数学がある。予習を……………

「……………してなかったな」

忘れていたことに気がついたベッドに既に入っていた体を引きずるようにして机についてノートを広げ、教科書を読む。

「……………」

徐々に襲ってくる睡魔と心に浮かぶ霜崎亜美の顔。昔は亜美ちゃんと読んでいたが今では霜崎さんだ。彼女が遠くに感じられる。自分とは多分、違う道を進んでいるに違いない。いや、違う道を進んでいるのは自分のほうかもしれない。まあ、当然のことだろう……

……あの影の中にいる相手を引きずり出さないと……………

そういったもろもろの事情を考えながら、彼は終わらぬ数学の予習を前にして敗北を喫したのだった。

時雨は目が覚め、辺りを見渡す。勿論、数学の予習が終わっていないノートは真っ白で、なおかつよだれの穴が開いていた。異世界の門ができたようないびつな形をそれはしている。

「……………」

体を起こす。無理な姿勢で寝ていたからか、体の節々が痛い。もう年なのかもしれない。現役高校生なのだがきつともう年だろう。関節痛によく聞くと聞いていた薬はどこにあっただろうか？

そんなどうでもいいことを考えている時雨の耳にチャイムの音が聞こえる。

「……………早いな」

時計を見るが、まだ七時前だ。なんだかだんだん来るのが早くなってきたような……………

「おじゃましまーす」

霜崎亜美の明るい声が聞こえてくる。まあ、朝から聞く声の中でも最高の部類に入るだろう。あれからずっと彼女は時雨の家に来ていた。何故かはよくわからないが、そっちのほうの時雨も安心する。

「おはよう、時雨君」

「……………おはよう」

自室に勝手に入ってきたことについては特にない。

見られて困るようなものは既に処分をしている。

ベッドの下、教科書のカバーをしたフェイクブックにファイリングしたお気に入りのものまで……………執拗なまでの霜崎亜美の探索には正直肝を冷やした。別にばれても構わないが学校で霜崎亜美がそんなことを言ってしまうえば間違いないあの学校からは転校しなくてはいけない。それだけは避けなくてはいけない事情を自分は持っている。

「まだ朝ごはん食べてないの？」

「うん、いま目が覚めたところだから……………」

異世界の門を体に刻んでしまった数学のノートを閉じ、自室を出ることにした。

「適当にくつろいでて」

「うん、そうするつもり」

食事を取るために一階へと降りる。こんな時間帯に彼女が来るの

は珍しいことだが、既に家族は仕事に行ってしまったている。まあ、どうやら母親が先ほどまでいて霜崎亜美を上へと導いたのだろう。テーブルに座って食事を始める。

味噌汁に焼き魚、ご飯といったところだろうか？どれも既に温かみが消えかけているようだった。

少し冷めてしまった朝食の食器を片付け、二階へと向かう。自室の扉を開けると……

「……………」

霜崎亜美は時雨のベッドで寝ていた。とても安らかな顔をしている。十分ほどの時間の間に眠ってしまったのだろう。制服で来て寝てしまっているから短めのスカートからは白い足が伸びていて、何かが見えそうである。

「……………」

朝から何を考えているのだ、自分は！と時雨は自分を叱咤して彼女を起こすために肩を叩こうとして……………」

「……………」 時雨君のえっち

寝言と共に彼女は寝返りを少しだけうち、時雨が触れようとした肩の場所には……………」彼女の胸が来ていた。

「……………」

がっしと大きな目の胸を掴んでいることに気がついて時雨はそれを放そうとするが、まるで離れない。左手で右手を掴んでようやく放す。

「はぁ……………」

顔が上気しているのが容易に想像できる。これはもう、やばい。色々としの感情が浮かんできており、白い足の上のほうにはピンク色の何かが既に見えている。やばいという感情は待ってくれなかったが……………」

霜崎亜美の影を確認することによって時雨の思考は鋭く、引き締まった。

「霜崎さん、おきてよ。学校に遅れるからさ」

「ん？あゝ寝ちゃったのか」

今度は確実に肩を掴んで揺さぶることが出来た。これまであの空間関係には迷惑ばかりかけられたが今回は感謝をしている。あの影がいなかったら今頃自分は警察に連絡されているところだっただろう。

笑えないそんなことを考えながら時雨は制服を手取る。

「じゃ、ちよつと着替えるから……………」

出てってもらいたいんだけど……………といおうとしたのだが、それを制するように霜崎亜美がすばやく口を開く。

「ああ、気にしないでいいよ。風景の一つだと思っていいから」

「……………そ、そうなの？」

「そうだよ」

そういうならば……………時雨はパジャマを脱ぎ捨てる。なんだからとも霜崎亜美がこちらを見てきているようなのだが、最近の風景は眼力を持つようになったのだろうか？きっと、彼女は長年同じ場所に置かれて命を手に入れてしまった日本人形みたいな置物となっているのだろつとなんだかわかりにくいことを考えていた。

じーつという擬音が聞こえてきそうな感じがしたが、それは気のせいだった。

「あ」

「え？」

突然に霜崎亜美が言葉を発する。

「その切り傷……………治ってなかったんだ？」

「ん？どれ？」

あざやら何やらは体中いたるところにはついている。しかし、切り傷は一つもないはずなのだが……………

「どこ？」

「ここ」

右肩あたりに冷たくてすべすべした霜崎亜美の指が傷跡を撫でる。

「……………そこの傷って……………ああ……………」

納得できた。そこにある傷は幼少の頃、それこそ、時雨と霜崎亜美がはじめてあったとき……………霜崎亜美が時雨に負わせた怪我と言っている。確かあの時は……………

「ごめんね」

「え？」

考え事の途中で意識が現実へと引き戻され、霜崎亜美の両手が時雨の胸の前まで回されていて背中にはやわらかいものが当てられている。

「な、何が？」

後ろを取られたことであの影のことが確実に時雨の頭の中を支配していくが……………影は時雨の足元でニヤニヤしているだけだった。どうやら、野次馬的存在のような奴のようだ。どうぞ、先を続けろとばかりにこちらに視線を向けている。

「……………あの、霜崎さん……………気にしなくていいからさ」

影のことが気にながらもこのいろんな意味で危機的状況挟み撃ちを回避する方法を模索してみる。やはり、ここは離れるように説得するのが一番だろう。

「それに、もうそろそろ学校だから……………」

やんわりとした口調で時雨は口を開いたのだが、

「私は学校より時雨君のほうが大事なの！！！」

そう言って彼女は時雨を振り回すようにしてベッドへと倒す。あとという間に時雨はベッドに倒れこんでしまった。

「ちょ、ちよつと何を……………」

ベッドに押し倒されて時雨は困惑。さらに、霜崎亜美は制服を脱ぎ始めようとしている。それを時雨はぎょつとしたまま眺めていた結果、霜崎亜美のワイシャツのボタンを途中まで開けて後は時雨の上へと乗り、時雨を見下ろす……………

瞳は潤み、頬は蒸気をしている。その瞳に見られることで心はずき、抱きしめたいという感情が時雨の中で強くなっていく……………だが、疑りぶかい性格である時雨はからかわれているのかもしれない

ないという感情が生まれたのであった。

「……………ちよつと、どいてくれない？」

「……………なんで？」

目の前の女の子が嘘をつくということを知らないということは知っている。からかうこともないというのも知っている。しかし、それは自分の視点からだけだ。もしかしたら影では嘘をつき、他人をあざ笑っているのかもしれない。

「僕は……………僕はからかわれるのは嫌いだ」

少し、侮蔑のこもった声があつという間に霜崎亜美の心を捉え、放さなくなつた。

「そんな……………私はからかつてるわけじゃ……………」

心のほぼ十割を占める存在にそんなことを言われ、彼女の心に不安と恐れ、表情はこわばって涙が頬を伝う。

「い、いや……………そんな、泣かないでも……………」

涙を見た瞬間に時雨の心は透き通つた。彼女は素直で一直線の好意を自分に向けているだけなのだ。

「ちよつと、どいてくれないかな？」

有無を言わず時雨は霜崎亜美の肩を掴んで起き上がり、ベッドに二人して腰掛け

、涙を流す彼女を抱きしめるような形で時雨は心をそのまま霜崎亜美に見せる……………

「ごめんね、君の事を信じられなくなつたんだ」

視線を霜崎亜美の影に向ける……………そこに、あの野次馬みたいな顔をした影の姿はなかった。今わかつた、あの影は中の良い二人を引き裂くためだけにここにいただけなのだ。

影がいなくなつた今、二人きりだ。

「し、時雨君は……………」

泣いていた霜崎亜美は涙をこらえながら抱きしめてくれている時雨にたずねる。

「……………私のこと、嫌い？」

「ん……幼馴染としては好きだよ」

「どういう意味？」

「……君のことなんて僕はさっぱりわからない……だからさ、こんなことをしてくるなんてさっぱり思っていなかった」

静かに目をつぶる。小さい頃の霜崎亜美は自分を引っ張って行ってくれているような頼もしい人物だったが……今抱きしめている彼女は今にも折れそうな人物だ。その気になれば、彼女の心は二度と立ち上がれなくなってしまふ可能性だってある。

その権利を霜崎亜美から勝手にもらってしまっているのだ、自分は。

「……だ、だって……私からどんどん……うつん、既に遠いところにいる存在だから、近づきたかった」

「そうかい？今、こうしてすぐとなり……いや、引っ付いているのね。遠くじゃないさ、こんなに近くにいますよ。僕は……」

……

抱きしめる力を強くする。細身の体が同じように力をこめてくる。霜崎亜美は時雨の顔を見ることなくたずねる。その言葉には重く、切ない気持ちが混ざっていた。

「……これから、どんなことがあっても隣に、近くにいていい？」

「構わないよ」

「私だけを見てほしいの」

授業中はどうするべきだろうか？と時雨は思ったが……

「可能な限り見ておくよ」

「……」

「い、いや、ちゃんと凝視しておくよ。穴が開くまでね」

「よかった……じゃあさ、キス……しよう？」

霜崎亜美は離れようとしますが、時雨がそれを許さなかった。

「……ごめん、先にさ……」

彼女は既に霜崎亜美を見ていなかった。彼の視線の先にはそろそ

る学校がはじまってしまうと指差している時計だった。

「……………登校しない？僕、今のところ皆勤賞なんだよね」

こうして、二人はあわてて鞆を掴むとその部屋を出て行ってしまったのだった。

もし、もしもだが……………霜崎亜美が時雨にからかわれているとわかってその場から走り去っていたらどうなっていただろうか？もし、時雨から彼女を抱きしめ、学校なんか関係ないという方向に持っていくてしまっていたらこの話は変わっていたに違いない。

物語は、まだあるのだ。これは、ただ、霜崎亜美と時雨の物語だったというだけだ。

## ブローグ2：とある屋敷の玄関にて（前書き）

えゝ最近忙しすぎててんでこ舞いの作者、雨月です。この物語の方向性をまったく決めぬまま突き進んできていますが……… どういったことになるのか作者にもわかりません。それでも、付き合ってくれるのならついてきてください。

## プロローグ2：とある屋敷の玄関にて

プロローグ2：とある屋敷の玄関にて

古ぼけていく館の玄関……………そこにはいつかの老人の姿があつた。  
「お久しぶりですね、元氣そうで何よりです……………人は皆、病氣に陥つたりしたときに健康のありがたみがわかりますからね。理解できない？まあ、いいでしょう。さて、確かに彼はとても甘い人生をこの先歩んでいます。皆さんに見せられるのは彼の人生の一部だけです。ええ、人は所詮一瞬だけの姿しか捉えることはできませんからね。笑っていたって陰では泣いている……………そんなこともあるということですよ。さて、こういったことを言うのもなんですが、異世界の扉というものは意外と近くにあるものなのかもしれません。たとえば、いつも通っている自分の家の玄関をくぐった瞬間……………そこが別世界だという可能性がないわけでもありません。根拠なく言うのはおかしいことですが、それも可能異性の一つということですよ。異世界の住人が我々を見れば異世界人です。無論、その逆も叱りですけどね。異質なのはどちらなのか……………あちらなのか、こちらなのか……………それを決めるのは自分自身です……………おっと、話が過ぎてしまいましたね。今回、彼は異世界へと赴くことになるでしょう。理由はどうあれ、言ってしまうえば異世界人の仲間入りといったところでしょうか？そこがどういった場所であろうと……………彼の人生の一部だということを忘れてはいけません」

老人は面白そうに笑うと玄関を閉め、空気を閉じ込めた。館は黄緑色の煙に巻かれ、姿を消したのだった。

## 四月二十二日 アナザーワールドスタート

一、

小説部の部室……そこは一つの特別教室（生物室）である。去年に見事部への昇格権を獲得し、総勢五名の少数精鋭を図っているいや、本当のところは今にも取り潰されそうに困っているのだが。本日は部長が先生に呼ばれて用事を済ませている間に部活終了時間が過ぎてしまっていた。この部長、天道時時雨は急いで家に帰るためにこの生物室へと戻ってきたのである。

もし、ここで彼がもうちょっと早く戻っていれば彼の人生を変えていただろう。

部室内に入ると異質の空気を感じ取った。彼にも色々事情があるような人間なのだがそれとはまた別の感じがする。

「あれ？」

誰かいるのかと思って首をかしげて声を出してみるが、反応はない。ただ、そこにいるだけの存在としか思えなかった。辺りを見る、誰もいない、困ったものだと思ふ。

そう、時雨は誰かが隠れているのだろうと思っていた。そして、その考えは半分だけあっていた。相手は隠れているのではなく……

『後ろがお留守ですよ』

「うをつ！？」

時雨は前につんのめり、こけそうになるが何とか踏みとどまって後ろを振り返る。そこにいるのは微笑をたたえた女性だった。女性の衣服は上下共に白。淡い印象を受けながらもその存在は特異なものという矛盾した存在だった。水の中で火が燃える……そんな感じだった。

女性はあるという間に時雨に近づくと唇を時雨の唇に……ため

らいもなく、重ねた。

「!？」

目を思い切り開けて時雨は相手を見る。相手は目を閉じ、長いま  
つげとその柔らかな感触しか彼は覚えられなかった。

彼女は離れ、時雨は放心状態に陥っていた。冷やされてゆく頭で  
考える。理解できない、何故、この女性は今、自分に唇を……重  
ねたのだろうか。

『知りたい？それなら、ついてきて』

「……………」

彼女は手をとるようなこともなく、生物室を後にする。時雨は、  
黙って走り……………

扉を出た、そこは野原だった。

急展開についていけない時雨の脳みそは考えることを放棄。体は  
命令を待っている待機状態となり、のどかな雰囲気だけが感じ取れ  
る。

落ち着け、僕の頭。時雨はそういつて考えることを放棄した脳に  
訴えかける。考えるのだ、この状況を。

何が起こった？女性についていった。そうしたら、これだ。間髪  
いれずに生物室の扉をくぐったらここにやってきた。不思議な扉並  
みのすごさだ。まさか、あの生物室の扉は未来の道具か何かだった  
のだろうか？

現実逃避し始めた頭を叱咤。

「とりあえず……………歩こう」

周りには人がいない。右手には森、左手には小川が流れている。  
空には雲が、大地には鮮やかな緑がこの世界を彩っていた。

のどかな場所だ。

道を歩いていくと、一冊の手帳らしきものが転がっている。拾い、  
裏と表を確認してみる。文字が書かれているが……………見たこともな

い文字だ。だが、なんとかかかっているか理解できた。いや、勝手に理解したというべきか？それには『天道時時雨』と書かれている。

「？」

首をかしげる。

勿論、こんな日記帳を見たことはない。それでも、自分のならば読んでも構わないだろうということで日記帳を開ける。中は新品と言っているほど綺麗だったが、女性が書いたと思われるこれまた見知らぬ文字だ。誰もいなかったたので、時雨はそれを読む。勿論、その文字を頭は理解できていない。だが、読める。

「……………私に聞きたいことがあるのなら、ここからまっすぐ進んでその大きな町の中央にあるお屋敷に住んでください。手段は問いません。執事になるもよし、鼠のようにこそそと隠れるもよし……………あなたの好きにして構いません。これはあなたの人生だから……………ああ、言い忘れていましたがここはあなたがいた世界とはぜんぜん違います……………」

1ページを使用したその言葉を理解し、ああ、先ほどの女性に違いないと確信した。見知らぬ誰かが知らないだろう自分をからかうには少しおかしい。次のページにも何か書かれているが、一番最初に『その場所についてから読んでください』と書かれていたので読まなかった。

こういう場合はどうであれ、従うべきだろう。ここがどんな世界なのかさっぱり理解できない。自分がもう少し幼かったら泣いて助けを求めているようが、今の自分は幼い自分ではない。幼児退行していたってこの異質な出来事は解決しないのだ。

静かに走り出し、上に輝く自分が知っている太陽よりも少し大きい太陽が傾く前に日記帳に書かれている場所に着いたほうがいいだろう。

走ること、三十分程度。汗を流しながら先を見ると町が見えてきた。いや、正確に言っていると都と言ったほうがいいかもしれない。それ

ほど、大きい町だった。

都へとはいり、辺りを見渡す。

「……………」

なにやら、異様な雰囲気がある。殺気……………そういったものだろうか？鋭い視線は自分に向けられているわけではないようだ、確実に誰かが誰かを打ちのめそうとしているには違いなかった。

少し遠くの場所で金属の触れ合う音が聞こえてくる。そちらのほうに走って向かってみると、二人の男が戦っているのが見えた。鉄の棒で攻防を繰り返しているようだった。

片方の一撃が右腕に直撃する。右腕は異様な音を立て、あらぬ方向に曲がってしまったのだが……………そこで、男はこちらを見る。

「……………これで最後だと思っていたんだが……………やはり、サバイバルを可能にする参加者がいたのか」

「え？」

男は徐々にこちらへと近づいてくる。なかなか聡明そうな顔をしているのだが、疲労しきっているのか焦点はあっていない。

「ちょ、ちよつとまった……………」

「問答無用！」

無手相手に鉄棒をふるう。振り落とされた鉄棒を見切つてかわす。レングで出来た道に穴が開く。本気だ、このままでは殺されてしまうかもしれない……………

相手が再びふるう前に相手の腕を掴む。思ったとおり、相手はそれを跳ね除けるために腕を引き……………それが男の過ちとなった。

静かに時雨の一撃が相手の鳩尾に当たる。鍛えていただろうが、洗練された一撃の前に男は膝を着いて昏倒。

「一体、何なんだ？」

辺りを見渡して安全を確認する。そして、次に日記を開けて、次のページを読んでみる事にしたのだが、期待しているような言葉はなかった。あるのはただ、『執事になるのなら主にだけは事務的に接し、常に冷静なポーカーフェイスを演じていてください』とある

のみだった。

日記帳を閉じたところ、ちょうど声が聞こえてきた。

「おお、そなたが今回の優勝者か！」

「え？」

声のしたほうを見ると、この町に住んでいるであろう人たちが時雨のことを見ていた。

「あの………」

恰幅の良い男性が前に出てきてその手を握る。

「うんうん、疲れておるのだろう？ ささ、早く我が屋敷へ………」  
囲まれ、連れて行かれる………一種の誘拐か？ そんな疑問が浮かぶまでもなく時雨は連行されていったのだった。後に残ったのは倒れてうめき声を上げているこの何らかの大会の敗北者を片付ける町人たちだった。

「……………執事？ ですか」

「おお、そうだと」

恰幅の良い男性はテーブルを挟んで時雨に告げる。この部屋は豪華で、贅沢のきわみと言つていいかもしれない。

「最近は何かと物騒だからな………私の娘の護衛と身の回りの世話をしてもらいたいのだ………飛び入り参加していたことはわかっているが、あの男を倒した君の腕を私は買っているんだ。勿論、ここに住み込みで働いてもらう」

どうやら、どこからか見ていたらしい。時雨としてもこの屋敷に滞在するようにあの日記帳に書かれていた。ここは素直に従っていたほうがいくらか賢いかもしれない。

「……………わかりました」

そう告げると、相手はとても嬉しそうだった。

「おお！ そうか！ では、そなたにあうサイズの執事服を用意しよう！」

指をぱちりと鳴らすとメイド服を着た女性が一人やってきた。

「!？」

メイドの顔を見てぎよつとする。生物室であつた女性にそっくりだ……だが、どことなく幼い。あの妖艶な感じがぜんぜんしないのだ。おまけに相手も首をかしげてこちらを見ている。

「さあ、これを着てくれ。早くしないと娘が帰ってくるからね」

どうやらどこかに行っているようで、時雨はその場で着替えさせられることになった。

「後は玄関のところまで待つていてくれたまえ……ああ、そうそう、執事をどうやって雇ったのかは絶対に口外しないでくれ。私と君だけが知っていることだからね」

では、私は忙しいから……そういつて恰幅の良い男性は部屋を出て行ってしまった。残されたメイドが時雨を玄関前に連れて行き、そこで待つておくように行って彼女もどこかに行ってしまった。

いつ帰ってくるかわからないが、とりあえず、時雨はそこで待つことにした。

庭園を見ると、来るときにはぜんぜん気がつかなかったがお金がかかっているように見えた。門外漢だからさっぱりだが、これは結構金を使っているに違いない。マジモノのメイドなんてはじめてみたりしたからなあとき雨は脳裏によぎる先ほどのメイドさんのことを考えていた。

すばらしい庭園を見ていてもさすがに飽きてきた時雨は手帳を取り出し、眺める。

ポーカーフエイス……その意味を考えていた。事務的に、どんなことがあつてもそれを貫くべきなのだろうとその文字にはこめられている気がした。次のページにも、文字が少しだけ書かれていた。

『一年後』

この屋敷に最低は一年以内といけないようだと時雨は理解した。門が開く音がし、時雨はそちらへと視線を送った。女性に連れ添つて一人の女の子……自分より二歳ぐらい年下に見える……がやってきた。青色の髪の毛を後ろで結つて風に吹かれては青い髪が

さらさらと揺れる。

だが、顔が不機嫌そうだ、時雨を見つけてから。

「……………あんたが新しい僕？」

僕と書いてしもべと読める……………ちなみに、下部とかいてもしもべと読める。そんなどうでもいいことを考えて時雨は頭の中に『事務的な態度』と『ポーカーフェイス』という言葉が思い起こされる。「さようです、お嬢様」

「……………ふんっ、部屋に案内してあげるからついてきなさい」

まったく面白くないといった調子でメイドと思われる女性と共に彼女の後ろにつく。

つれてこられた部屋には箒、モップ、雑巾にトイレのつまりを解除する魔法のステッキがあるような場所だった。

「ここが、今日からあんたの部屋よ」

「わかりました」

慇懃に勤め、心の中では『どう見たって掃除箱じゃねえか！しかも、僕の部屋よりでかい！』と大声で叫ぶ。部屋の大きさに文句はない。

その態度が癪に障ったのか、眉が釣りあがる。

「……………やっぱ、なし」

「そうですか」

再び時雨とメイドを従えて彼女は今度は庭へと向かったのだった……………日記に書かれていた通り、完璧にしたがうことにした。

つれてこられた先には見知らぬ文字で『サリー』と書かれた先ほどの掃除部屋より若干狭い部屋のような場所だった。

「今日からあんた、ここ」

「わかりました、お嬢様」

おおかた、犬小屋だろうと思って中をのぞくと……………そこには馬がいた。さすがに驚きそうになったが、のっぺりとした表情で頭を下げる。

やはり、この態度が癪に障っているようで目つきが鋭くなる。

「……………先客がいるからこもなし」

彼女は怒っているのが明白なのが理解できるほど危険なオーラを発していた。私、おこってます。そんな感じた。

後に時雨が連れて行かれた場所は様々だった。トイレ、屋根裏部屋、お嬢様の父の部屋、庭、地下室、地下牢屋、メイドの宿舎、犬小屋に屋根の上と……………どこも時雨の家や部屋と比べたらでかくて住みやすそうだった。

この屋敷の案内はもう必要ないというぐらい彼女は時雨を連れまわしている。廊下を通るとたまにいるメイドさんが起こっている時雨の主を見るたびにあわてて頭を下げて目を合わせないようにしている。

時雨と共にいるメイドはこれまたポーカーフェイスなのか、時雨と共に彼女の後ろを静かにについているだけだった。

そして、唐突に彼女は立ち止まった。

「……………つまんないわ!」

叫び、後ろを振り返る。時雨はお嬢様の後ろにいたメイドよりも後ろでお嬢様にあかんべえをしていたのであわてて冷静な顔をして、たずねる。

「何がでしょうか?」

「あんたにいつてないわ!ちょっと、知恵を貸しなさい!で、あんたは後ろを向いてなさい」

後ろにいたメイドを引き寄せてなにやら極秘に話をし始める。時雨は後ろを向いて背筋正しくたって話が終わるのを待っている。

「……………なるほどね……………もうこつちを向いてもいいわ」

何かを得たといった顔をしたお嬢様は時雨に告げた。

「私の部屋に住みなさい!」

これにはさすがに時雨は驚いたが、すぐさま答える。

「、わかりました」

「……………冗談よ、冗談」

「これは失礼しました」

そうだろうと思っていたので時雨は頭を下げて彼女に進言した  
だろうメイドを見やる。彼女の顔は冷たかった。

「いらいらするわ、あんた」

そういい、再び歩き出すと……………

「あら？とても可愛い執事さんね？」

前のほうから豪華そうな服を纏った女の子がやってきた。こちら  
は時雨と同じ年ぐらいだろうか？

「……………あんた、私のうちに何しに來たのよ？」

眉を吊り上げ、食って掛かるお嬢様。時雨は無表情で相手を見る。  
おお、胸が大きいな〜とか、綺麗だな〜とかそういう言葉は心の中  
にそっとしまっておいた。ついでに、彼女の顔もじつくりと覚える。  
「知っていたら教えてあげるけど？親戚ですからね」

むっとし、お嬢様は答える。

「いいわ、知らなくて……………どうせ、面倒ごとでしょうからね」

ぷいと視線をそらせて歩き出す。時雨とメイドは共に歩き出した。  
「お待ちになつて、その執事さん……………これをもつていってくだ  
さいな」

手渡されてそれをポケットに入れるように指示される。

「……………これは？」

「後ほど、見たほうがよろしくてよ……………では、ごきげんよう」

そういつて彼女は去っていった。お嬢様のほうは怒り狂っている  
ようで後ろを見ようとしていない。

時雨はそれに静かについていくだけだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0723e/>

---

CONNECT ~コネクト~

2010年10月8日15時49分発行